

より添い「支縁」で人をつなぐ

— 無縁社会を有縁化する「人間菩薩」の思想と実践 —

天理大学おやさと研究所教授 金子 昭

一、世界最大の仏教NGO・慈濟会

私は、世界最大の仏教NGOである台湾の財団法人仏教慈濟基金（慈濟会）の話から始めたいと思います。

今から四十八年前の一九六六年、当時二十九歳だった證嚴法師という一人の尼僧が、三十五人の弟子たちと貧民救済の会を結成しました。当時の名前は仏教克難慈濟功德会でした。これが慈濟会の出発点です。弟子たちは出家の人も在家の人もありましたが、全員女性でした。いまでも委員と呼ばれる幹部会員の大半が女性で、そのために慈濟会は、女性らしい優しさと感受性を感じさせる組織です。

一九八一年、慈濟会は財団法人格を取りました。これが現在の正式名称である財団法人・仏教慈濟基金会です。慈濟会は、慈善・医療・教育・文化（人文）の「四大志業」、さらに国際救援、骨髄バンク、地域支援、環境保全の四つを加えて「八大脚印（法印）」という規模の大きなボランティア事業（志業）を世界中で展開しています。会員は台湾を中心に四百万を超えると言われています。慈濟会は、宗教法人というわけではありませんが、仏教団体としての側面、そして社会貢献事業団体（NGO）としての側面をあわせ持っています。

慈濟会のホームページにアクセスしますと、最初の画面に、「慈濟大藏經」というタイトルが出てきます。ここで「大

蔵経」と銘打っていることに注目したいと思います。ふつう仏教経典とは、お釈迦様の言行録や諸々の仏様の事柄について記したものです。この「慈済大蔵経」では慈済ボランティアたちの活動紹介、活動記録となっています。なぜかと言えば、慈済会ではボランティアとは人間菩薩という名の菩薩（仏）だからです。人間はだれもが潜在的に仏の心（仏性）を持っていますが。それを実際の人助けに発揮することで、だれもが人間菩薩となるわけです。そして自分に縁のある人々に関わり、それを手助けしていく。それが「縁を支える」という意味での「支縁」となります。

慈済会による「支縁」の思想を一言で言うならば、「無縁大慈、同体大悲」となります。「無縁大慈」とは、無縁の者にも大きな慈しみをかけることです。仏様の眼差しにおいては、無縁の人間など存在せず、だれもお互いに縁のある衆生なのです。「同体大悲」とは、自分の体であれば、たとえ手の先でも足の指であろうと、どの部分が痛んでも、それを自分の痛みとして感じるように、衆生の苦しみを自分の苦しみとして受け取ることです。慈済会でボランティア活動をするメンバーはみな在家の人たちですが、そうした活動自体が在家の人々にとつての修行という意味をも有しています。まさに人間菩薩の行なのです。

二、震災での大規模義援金と「善の循環」

慈済会はこの度の東日本大震災の際に、とても目覚ましい活動を行いました。震災の年の二〇一一年六月から十二月にかけての半年間、被災自治体二十五市町村九万七千世帯に義援金配布活動を展開しました。しかも、世帯ごとの人数に応じて現金を被災者に直接給付したのです。その総額は実に五十億円にも上ります。民間団体が直接、被災者にこれほどの規模で義援金を渡すのは、きわめて異例のことです。

慈済会はこの義援金配布を公民館や学校などの会場で行ったのですが、そうした会場には竹筒で出来た義援金箱を置き、被災者にも義援金を募っていました。この義援金はさらに困窮した人々に当てられるというものです。災害の

被災者に義援金を呼び掛けるというのは、とても驚くべきことではないでしょうか。

私が取材に行ったのは岩手県の釜石市での配布活動でしたが、被災者の中には、慈済会の活動に共鳴して一緒に義援金を呼び掛けている人もいました。慈済会は、被災者の人たちを助けるだけではなく、助けられた人がまた別な人を助けるということを、こうした義援金募集を通じて目指していたのです。

慈済会の日本支部は東京にあります。ここでは現在、毎月二回、代々木公園で炊き出し活動を行っています。そして、彼らはなんとホームレスの人々に対しても、義援金の募金をお願いしているのです。私が取材に行った時は、ちょうど米国ニューオーリンズのハリケーン「カトリーナ」の被災者のための募金を集めていました。ホームレスの人々の募金ですから、それこそ一円玉、五円玉ばかりで、たまに十円玉が混じっているのですが、それを出すのは彼らにとつては大変なことだと思ふのです。しかし、それによって、彼らに一方的に援助を受けるばかりではなく、自ら少しでも人々のために可能なことをしてもらうことで、人間としての誇りも養われることになるのです。そもそも人間どうものは、いつまでも助けられっぱなしでは、実はとてもつらいものなのです。

助けられた人が助ける人になつていくことを、慈済会では、「善の循環」という言葉で表現します。この「善の循環」が「支縁の循環」にもなるわけです。助けられた人が助ける人になるためには、だれかが人を助ける輪を先ず回さなくてはなりません。人は助けられることによって、その人の内面において助け心が喚起され、その人が今度は人を助ける人になるのです。

これを仏教的に表現するならば、衆生からの人間菩薩の再生産となるでしょうか。まず発心した人が慈悲喜捨の行を実践します。それによって衆生が救済を得ることになります。救済を得た衆生の中から、今度は人間菩薩への発心をする人が出現し、彼らが慈悲喜捨の行を実践するようになるのです。いわゆる宗教者だけが人間菩薩ではなく、人間であるかぎり、だれもが人間菩薩になりうるのです。しかしその場合でも、先導役は宗教者、なかならずその言

葉に相応しい意味で、自ら仏教者であると任じる者が務めることになるのではないのでしょうか。

二、災害ユートピアから日常ユートピアへ

月日の経つのは早いもので、東日本大震災から三年経ちました。被災地では、あ那时的非日常の事態から、日常生活へと戻るべく復興の歩みを続けています。それにともない、被災者への支援活動も、最初期の緊急支援から、復興支援、そして日常支援に続いていかなければなりません。このとき、日常支援というのが、まさに「支縁」という言葉で言い表すに相応しい援助の活動になるように思います。

非日常というのは、大きな災害や事故の際、突如として出現する事態です。こうした緊急事態の中で、お互いが着の身着のまま逃れてきたとき、そこでは人と人との「垣根」がいわば取れた状態になります。よく言われているように、そこでは人々は決してパニック状態にはならず、むしろ逆にお互いに打ちとけて、助けあいの気持ちになるというのです。ノンフィクション作家のレベッカ・ソルニットは、『災害ユートピア』（原題は *A Paradise Build in Hell* 「地獄に打ち立てられた天国」）の中で、そのような状況を克明に描いています。

しかし、これに対していうと、日常というのは、人と人との間に再び「垣根」を築いてしまう状態でもあります。日常への回帰というのはこのことです。これは、だれもが落ち着いた私生活を大切にしたいという、ごく自然な流れから帰結します。けれども、その「垣根」を越境して、心を通わせる勇氣を持つ必要があります。それが「結縁社会」になるわけです。災害ユートピアがあるのならば、日常ユートピアがあってもよい。いやむしろ、私たちは積極的に日常ユートピアを建立していくべきでしょう。

四、有縁社会・無縁社会・結縁社会

そこで、私たちはあらためて、自分の身の回りの日常を点検してみる必要があるように思います。私は「縁」という言葉を用いて、このことについて考えてみたいと思います。

伝統的な日本社会は、「有縁社会」でした。これは、地縁・血縁をベースとした共同体社会でありました。ここでは代々伝統の継承も行われますが、その一方で、他所者を排除するようなどころが見られたり、時として息苦しさを感じさせることもあったりします。そもそも共同体というのは、自己完結的であり、閉鎖的な性格を持っています。今ではかなり崩れつつありますが、日本の会社なども、一種の共同体のようなものでした。社会福祉ならぬ会社福祉という感じで、会社が定年まですべての面倒を見てくれる代わりに、サラリーマンは会社に献身的に忠誠を尽くすという関係があったわけです。

現代の日本社会は、「無縁社会」と形容されます。これは、地縁・血縁が希薄な都市化・個人化社会です。ここでは、人々はそれぞれ自由な生き方ができますが、その一方で失敗しても、誰かがかばってくれるわけでは決してなく、原則どこまでも自己責任で行わなければなりません。下手をして社会的に孤立しても、それもまた自己責任と見なされてしまうところがあります。

これからの日本社会は、「結縁社会」とならなければなりません。これは既存の縁を越境して再度つながる有縁社会と言つてよいでしょう。「結縁」というわけです。いったん縁が切れた無縁社会を経由して、再度、縁を結ぶものです。昔ながらの血縁・地縁による有縁社会に戻ることは、決してないのです。そのような時計を逆戻しにすることは、そもそも不可能です。

「結縁社会」を作るためには、「縁」を支える担い手が必要ですが、それを考える前に、まず「無縁社会」という現

状を少し分析してみる必要があります。無縁社会という言葉は、我が国ではすっかり人口に膾炙しています。言葉だけではもちろんありません。実体的にも、私たちの身近なところで、無縁社会の現象はポツカリと出現しているものです。

この無縁社会というものに、なぜ宗教者が注目したのでしょうか。それは、大きく二つの理由があると思います。まず第一には、地縁・血縁など伝統的・共同体的つながりが解体していることへの危機感があったことです。日本では、伝統宗教であれ新宗教であれ、その良しあしは別として、宗教は個人の宗教というよりは、むしろ家族の宗教でありました。ですから、社会の無縁化にあつて、宗教もまた自らの存立基盤が崩れていくことへの危機感を抱いたからだとも言えます。

第二には、宗教とりわけ仏教においては、縁という言葉そのものがなじみ深いものでありました。しかし無縁という言葉は、誰も祀る者がいなくなった死者に対して、無縁仏、無縁墓地という形でいうものでした。それが生きている人まで「無縁化」していることに衝撃を受けたわけです。

その一方で、無縁という言葉は決してマイナスの意味ばかり持つものではありません。むしろ宗教的にはプラスの意味合いのものです。つまり、この世から自由になることで、この世に自由に関われる生き方こそ、無縁の肯定的側面となるわけです。私は、まさにそうした存在こそ宗教者（仏教者）だと思つています。

ただ、一般の人々にとっては、そうもいけません。人との縁にあぶれることは社会的孤立を意味し、そこから孤独死に至ることだってありうるからです。あぶないのは男性高齢者です。周囲の人と会話する機会が「二週間に一回以下」の割合というのが、六十五歳以上の独居男性では約17%にも上るといふ統計があります（国立社会保障・人口問題研究所「生活と支え合いに関する調査」報告、二〇一三年七月より）。それにしても、いくらなんでもそんなに人と会話しないことはふつうありえないですね。全体の約91%は毎日、家族や友人、近所の人たちとなにかしら会話を交わっていて、わずか2%が「二週間に一回以下」なのですが、これはとても心配な数字です。

五、共感できない他者への「宗教縁」

それともう一つ、他者ということを考えてとき、共感できる他者と共感できない他者がいるということが挙げられます。東日本大震災の際に、津波で大切な家族や友人を失い、自分たちも学校の体育館などに身を寄せ合って避難している姿をテレビの映像で見たとき、多くの人々は、もし自分があのような状態に置かれたらと思ひ、義援金を送ったり、自分たちでも可能なボランティアをしたりしました。それは、たとえ見ず知らずの人であっても、まさに我が身に即して共感（感情移入）ができたからです。

これと正反対なのが、ホームレスの人たちにしばしば注がれる視線です。今ではかなり減りましたが、大阪だと釜ヶ崎（いわゆるあいりん地区）やその周辺では野宿する人たちが少なからずいます。地元で商店を営んでいる人の中には、自分の店の前で寝られてはたまらないと、シャッターを下ろす前に水をまいて、野宿できないようにする人がいるという話を聞きました。また、一九九五年の阪神・淡路大震災の避難所でのエピソードですが、大勢の人たちが今回の震災のときと同じように、体育館などに避難してきました。その中にホームレスもいて、どうも臭いがするし、酒盛りなんかやっていると、同じ被災者なのにと疎んじられたということがありました。もともと家を持たないホームレスと、自分たちのように住む家を失った普通の市民とを一緒にしてくれるというわけです。こうした事例が、まさに共感（感情移入）できない他者の存在を示しています。

しかし、この世から自由になることで、この世に自由に関わられる生き方ができるならば、どんな他者にも共感できるはず。私は、まさにそうした存在こそ宗教者（仏教者）だと思ふのです。この世に生きていけるけれども、心の中ではこの世を超越しています。それができるのは、この世を超えた神や仏と直接つながっているからです。

そもそも、神仏の目から見れば無縁の者は存在しないものです。無縁の者でも神仏の大きな慈悲心で包めば、すべ

てが有縁の存在になるものであります。また伝統的な「有縁社会」のように、絆、地縁、血縁、共同体に注目が行けば行くほど、逆にそこから漏れた人々の排除も、実は同時進行している可能性があります。そこを回避できる縁が「宗教縁」なのです。

人間社会とは、お互いに縁を支え合つて成り立っているものです。さまざまな生きづらさの問題があります。家庭内暴力、依存症、虐待、いじめ、不登校、引きこもり、貧困の連鎖、単身者の高齢化、老老介護、孤独死、自死などがそうです。これらは実はみんなつながっている問題でもありますが、しかしながら、そうした問題を抱えた人々はしばしば社会的孤立(無縁化)しているため、一般には見えにくいものになっています。だからこそ、より深い「支縁」、すなわち息の長い伴走型支援が求められます。なにより、断ち切れた縁を新たにつなぎ直すことです。宗教的な意味での「支縁」が目指すのは、それを通じて、だれもが神仏の縁で結ばれた尊い存在だということを気付かせていくことにあるのではないのでしょうか。ここに、人間の支縁から神仏の縁の気付きに至る道すじが見えてくると思います。

六、支縁のまちネットワークの活動

ここで、私自身がささやかながら関わっているグループである、「支縁のまちネットワーク」の活動を紹介したいと思います。

支縁のまちネットワークの出発点は、二〇〇三年に発足した「ソウルイン釜ヶ崎」(野宿者問題を考える宗教者連絡会)です。釜ヶ崎は日本で一番大きな日雇い労働者の街と言われています。日本で唯一暴動が起きる街と言われたこともあります。しかし、いまや住民の大半は男性高齢単身者が占め、労働者の街というより生活保護の街というような感じになっています。「ソウルイン釜ヶ崎」というこのグループは、釜ヶ崎に、宗教にも通じるスピリチュアリティを感じながら、自分たちに可能なホームレス支援を模索するというものでした。

支縁のまちネットワークが始動したのは二〇一一年、震災が起きる直前のことでした。ソウルイン釜ヶ崎から、活動の場を釜ヶ崎以外に広げ、活動の内容もホームレスや生活困窮者への支援以外にも広げ、そして宗教者以外の人々との連帯をも進めていくという、展開の方向性を持って始めたのです。

釜ヶ崎で目立って活動している宗教は主にキリスト教です。仏教や新宗教も無いわけではないのですが、なかなか活動の取りかかりがつかめなかつたり、活動が孤立したものになりがちのところがありました。支縁のまちネットワークの設立には、主にそうした仏教や新宗教関係者やその組織が関わっていました。主な参加組織としては、真宗大谷派僧侶の川浪剛氏が中心となっている「支縁のまちサンガ大阪」、また金光教の教会長である渡辺順一氏が代表をとめる「支縁のまち羽曳野希望館」があります。また、このネットワークの一つの特徴でもあるのですが、宗教者だけでなく宗教研究者もメンバーとして協働する態勢を取っていることです。

設立の二〇一一年という年は東日本大震災の年でもありましたので、その年七月十六日には、立正佼成会大阪普門館を会場にお借りして、東日本大震災祈念集会を開催いたしました。支縁のまちネットワークは、それ自体が実働団体であるというよりは、宗教者による個々の活動団体の交流をはかり、協働を促進するネットワーク組織の性格を持っており、メインの活動行事としては交流集会を行うようになり、現在に至っています。

一昨年（二〇一二年）二月十九日には、「無縁社会における宗教の社会活動の可能性について」というテーマの下、金光教大阪センターを会場に、第一回の交流集会を開き、仏教、金光教、天理教で、それぞれNPO法人や任意団体を組織しているグループの代表に活動報告をしてもらいました。

昨年（二〇一三年）三月二日には、「宗教者によるさまざま『支縁』を語る」というテーマの下、第二回交流集会を天理教大阪教務支庁で開催いたしました。神道・仏教・キリスト教・天理教の宗教者が発題し、ディスカッションをいたしました。

本年（二〇一四年）三月一日には、大河内大博氏（いのち臨床仏教者の会副代表）に「自坊を離れて社会活動をすることの意義」と題して、第三回交流集会を浄土真宗本願寺派栄照寺で開催いたしました。このときは、第一部が大河内氏の講演、第二部が活動団体の報告と意見交換をいたしました。

このような感じで、支縁のまちネットワークは、草の根のレベルでさまざまな宗教交流を通じて、地味に地道に活動をすすめているところです。

七、四つの問いかけ

私は先ほど、日常ユートピアを建立すべきだということを申しました。日常ユートピアの建立とは、仏教的に言えば、日常世界を仏国土にしていくことではないでしょうか。私が最も好きな仏教の言葉は、「縁」です。仏国土では、だれもお互いに無縁ではありえず、そこには助けあいの人間関係のネットワークが縦横に張られています。慈濟会の言い方をすれば、人間菩薩網というネットワークになります。しかし、そうした仏国土は一朝一夕にはできるものではありません。私たちの身の回りのエン（縁）パワーメントから始める必要があるわけです。

発題の最後にあたり、私は会場の皆さまに四つの問いかけをしてみたいと思います。と申しますのも、これらの問いかけは「仏教者の社会参加」に関わるこの公開シンポジウムへの問題提起にもなるかと思うからです。

まず一番目は、『共感できない人』を見落としていませんか？』という問いかけです。

これは、「どんな人であつても、自分と同じ人間だということをどこかで忘れていませんか？」という意味です。だれにでも同じように共感できるとは限りませんが、それでも自分の共感力を上げていくことで、今まで見落としていた「共感できない他者」が見えてくることありうるのです。

二番目は、『同質化』の圧力で無視してしまっている人はいませんか？』です。

ボランティアでも宗教でもそうなのですが、熱心な人の中には、往々にして自分の流儀で押し通す人がいるものです。そうした人が自分の立場や役割を通じて、また自分たちで多数派になって、それに従わせることがあるのですが、それが「同質化」圧力です。もしかしたら私たちは、「つついっ気が付かず、そうした圧力を人に与えているのではないですか？」という意味の問いかけです。

三番目は、『「ご近所」にだれが住んでいるか知っていますか？』です。

ここでいう「ご近所」とは、物理的な意味での自分の家の近所だけではなく、学校のクラスメート、会社の同僚、昔の同級生たちの間に、ひよっとしたら私たちの助けを求めている人がいるかもしれない、ということ。そうした人が「私たちの身の回りに潜在的にいるのではないですか？」という意味なのです。

最後が『あなたは「助けられ上手」ですか？』という問いかけです。

日本人は、できることなら人を手助けしたいと思っている人の割合はけっこう多いと思います。でも、助けられるということに対しては、どこか抵抗があつて遠慮してしまうところがあるのではないのでしょうか。その意味で日本人は「助けられ下手」なのかもしれません。でも、「助けられ上手」ならば、じつは「助ける人」を助けてあげているのだといえるのではないのでしょうか。「あなたは」と言いましたが、これは私自身も含めた私たちへの問いかけでもあります。「私たちは助けてほしいとき、遠慮したりしないで助けてもらっていますか？」ということ。です。

ご清聴どうもありがとうございました。